

形

▼本企画は「形」をテーマに、集中した時間をつくります。様々な専門家によるクラスを軸に、大岩雄典による**美術展示**、カゲヤマ氣象台の**円盤に乗る派**による**新作演劇**の上演をします。モデレーターは、演劇において形式主義は可能かを問う作品群を90年代から発表、様々な実践的なプロジェクトを行い、近年はその知見から上演芸術に関する基礎論の講座やイベントを主宰する劇作家の岸井大輔。

▼最近、日本の現代芸術では、イベントや話題性が重視されがちで、(作品)や<上演>について語られることが少なくなっているように思います。アートが、政治や商売へ無闇に収斂していくように感じている人も多いのではないのでしょうか。社会的意義を訴えることや解説・教育普及のためにも、アートの美学的・芸術的探求を集中して共有する機会を作りたい。そのためにも、芸術が歴史的に扱ってき、いまだ議論がつかることのない「形」をテーマにします。根本的に考え、共有することこそ、いま日本にも芸術にも必要ではないか。

▼参加者とともに、新しい**実在論**や**芸術**を見据えつつ、フォーマリズムやイメージ論が扱ってきた「形」の議論を深め、ファイナート、詩、伝統芸能、イメージ、テキスト、幅広く考える時間をつくりたいと思います。

クラス
<p>本企画は、20種90分のクラスがあります。クラスは日ごとにテーマが設定され、通して受講することで、現代アートについて言葉を得ることができるように設計されています。</p> <p>企画者の岸井大輔（劇作家）からはじめ、形についての基礎的な知見を、加治屋健司（美術史、表象文化論）、郷原佳以（フランス文学）飯盛元章（哲学）、内野儀（演劇批評、パフォーマンス研究）、江澤健一郎（フランス文学研究）と振り返ります。その上で、形の可能性を、平倉圭（芸術学）、田中純（思想史、表象文化論）、久保田晃弘（研究者）、星野太（美学・表象文化論）と考えます。さらに、表現に携わる様々な実践家、木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎主宰）、河野聡子（詩人、書評家）、高柳恵里（美術家）、飯岡陸（キュレーター）、遠藤薫（現代美術、工芸作家）、大岩雄典（美術家）とこれからの「形」を考えます。松永伸司（ゲーム研究、美学）と岸井の対談や、篠田千明（演劇作家、演出家、イベント）、中村史子（学芸員）、額田大志（作曲家、演出家）のワークショップなども行い、形について多面的に集中して考える時間を準備します。</p>

美術展示
<p>大岩雄典 企画「別れ話」Breaking the Relation</p> <p>水難、嬌声、ホテルの小部屋。インスタレーションとフィクションについて取り組む大岩雄典による新作展示。劇場としても使用される「北千住BUoY」の2階にある稽古場とアートギャラリーを用いて、ひとつの、あるいはひとつになれない物語を構成します。</p>

<p>※「形」のいずれかのクラスに申し込みいただくと、その前後の時間で大岩雄典個展「別れ話」をご覧いただけます。</p>
--

演劇上演
<p>円盤に乗る派　新作演劇上演「Qua（くあ）」</p> <p>作：カゲヤマ氣象台</p> <p>出演：日和下駄</p> <p>「Qua（くあ）」は、4つのシーンから成る、モノローグのための演劇です。モノローグは私性に接近しますが、同時に裏切りもします。過去に対して目配せをしつつ、しかし決してそこに立脚しないありようがふるまいとして表れたときに、その場所、その瞬間だからこそ偶然成立してしまうものを演劇として構想します。これは今後様々な場所で上演するための作品となり、俳優・日和下駄のライフワークとなる予定です。</p>

円盤に乗る派について
<p>円盤に乗る派は複数の作家・表現者が一緒にフラットにいられるための時間、あるべきところにいられるような場所を作るプロジェクトです。軸になるのはカゲヤマ氣象台による上演作品ですが、様々なプログラムや冊子の発行、シンポジウムなどを並行して行います。ここで試みられるのは匿名／顕名が平等になる場所です。誰でも発信が可能であり、大きな民衆の声が響き渡る世界の中で、小さな声を守られる場所がとても貴重です。さまざまな声飛び交ううさい場所を造れて、そこであればしっかりものを見、考え、落ち着くことのできるという場所を確保します。それは演劇にまつわるあらゆる要素を、生活とダイレクトに接続するということでもあります。このプロジェクトを通じて、種々の、色んな意味で「実際に活用できる」アイデアを提唱します。ここを訪れた観客たちが各々の生活の中で、それらを実践し、少しでもより生きやすくなることができたいと思います。いつか現れる円盤に乗るということに、強い目的も思想もありません。それはただ「円盤に乗ってみた」という事実が残るだけです。他の人に何ら影響を与えることもなく、大きな社会にとって何の関係もありません。しかし「円盤に乗った人」と「乗らなかつた人」は明らかに何か違ってしまったはずであり、あくまで個人的なその変化に興味を持つ人々、誰にも気づかれない秘密を抱えたい人間たちこそ、「円盤に乗る派」と呼べるでしょう。https://horuha.net</p>

形について知ることから、もう一度始めたい。芸術について、広く透徹した視点を持ちたい人と。

2020年2月8日(土)－16日(日)　フリーパス：10,000円(学生 6,000円) 1クラス：3,000円(学生 1,500円)

8日(土) 形と遊ぶために	<p>8日間にわたる「形」を楽しむすぐすためのオープニング。企画者である劇作家の岸井は、「プレイ」について考えるたび必ず「形」の話にぶつかり、驚いてきました。「遊び」と「形」という、一般には対立すると考えられるコトバの根へおりていきます。遊びながら。</p>
13:30～15:00 「Qua（くあ）」円盤に乗る派	
16:30～18:00 岸井大輔 「プレイと形」	<p>劇作家の目線で「形」を「プレイ」から整理します。ゲームプレイ、演奏、演技、戯曲に現れる、あるいは現れないがある、あるいはないが見える形。本企画モデレーターとして、全講座の概要紹介もします。</p>
19:30～21:00 対談 岸井大輔×松永伸司「プレイと形」トーク版	<p>ゲストにビデオゲーム研究と美学・芸術の哲学の松永伸司を迎え、岸井の講義を受け、PLAYとアートについて話します。演劇を背景とする岸井と美学を元にゲーム研究の前身を開拓する松永の対話です。</p>

9日(日) 形の基礎

13:30～15:00 加治屋健司「フォーマリズムとその彼方へ」	<p>まず、1950年代末から60年代初めにかけてアメリカで生まれた美術におけるフォーマリズムを確認したい。クレメント・グリーンバーグ、マイケル・フリードなどの議論をたどりつつ、かつては同志だったが袂を分かつた元フォーマリストのバーバラ・ローズやロザリンド・クラウスなどの議論も参照して、フォーマリズムの何が問題だったのかを見ていきたい。さらに、「形」への関心の高まりがフォーマリズムを裏切ってしまう局面が生じた1970年代の文化状況について考えてみたい。</p>
16:30～18:00 郷原佳以「語りの形、フィクションの始まり」	<p>文学の文学性の形式的な探求は二十世紀初頭にすでに終わった試みとみなされがちである。結局のところ、語用論的には文学言語も日常言語もそれ自体としては何も変わらない、もしくは、厳密な区分は不可能であり、ただパラテキスト（表題、書物の形）を参照するしかないのだと。要は誰かが語っているのであり、いずれにせよ何らかの言語行為（宣言、依頼、命令、契約、あるいはその模倣）が起こっているのだと。しかし、逆に考えたらどうか。結局のところ文学言語も日常言語もそれ自体としては何も変わらない。そこでは誰も語っていないのだと。誰も語っていない語りの探求は、文学言語の特殊性のためではなく、言語一般のためになされなければならない。言語学およびさまざまな批評理論を動員して考えたい。</p>

10日(月) 劇と形

16:30～18:00 内野儀「演劇という形式／演劇における形式」	<p>狭義の演劇ということでは、そもそも「フォーマリズムやイメージ論が取りこぼした「形」の問題」（岸井大輔）などあるのか、という問いが出発点になるだろうか。「コンセプトや社会的意義の前に、作品や展示や上演を考えた」という岸井さんの呼びかけに対し、演劇における「形」の問題を、「情動」や「権力」や「好き嫌い／趣味判断」抜きで、今、どう考えることが可能なのか、2月までになにか言えるようになっていたい。</p>
19:30～21:00 木ノ下裕一「歌舞伎における“型”のカタチ」	<p>歌舞伎における「型」を一言で定義するのは、極めて難しい。しばしば「演出」と言い換えられるが、両者は必ずしも＝（イコール）ではない。確かに、伝統演劇の先達たちは、自身の表現の到達点を「型」として残してきた。しかしそれらは、「演出」という言葉から想起されるような戯曲・身体・空間という三点と適度の距離を保ったところにあるものではなく、まず俳優の肉体に内在する。当然、俳優の身体的条件、芸風や仁（ニン）と不可分</p>

11日(火・祝) コレクティヴの形

13:30～15:00 「Qua（くあ）」円盤に乗る派	<p>「形」と芸術といえば、美術で主に議論されてきたように思われますが、演劇でも重要なテーマです。演劇におけるモダニズム(が可能か)と、古典芸能の型の問題を扱います。演劇に興味がないこそぞひひ。</p>
16:30～18:00 河野聡子「なぜ詩人は詩集を作らなければならないのか」	<p>詩と呼ばれる領域は「形」という概念に並々ならぬ執着を抱えてきました。これはつまり、人が詩を語るとき、第一に問題とされるのはつねに「形」であるということです。小説について語るとき、人はまず文体や構成、内容の理解について語りますが、詩において語るときは「形」が先に来ます。ただし詩の「形」は、言葉を発声する際の韻律や文字で表された時の視覚的な形式によるものだけに限りません。ある目的のために書かれた文章が、意味内容として空疎にすぎたために、読み手によって「これは詩である」と（時に侮蔑的に）語られる場合もあります。つまり文章全体が形式だと</p>

13日(木) 見せる形

16:30～18:00 篠田千明「よくきく」リハーサル」	<p>わたしは“きくこと”で演出を考える。普段から3組の会話なら普通に頭に入ってくる。ゾーンにはいると5組以上無限に情報がきいてはいつてくる。そのようにして作った過去のいくつかの作品を紹介しながら、実際にBUoYでも「よくきく」リハーサルをみんなで行いたいと思います。耳で見て目で聞くことで、過去の記憶をききながら、未来の記憶によく効くように。</p>
19:30～21:00 中村史子	<p>「コンセプトや社会的意義の前に、作品や展示や上演を考えたいと思います。」という序の言葉を受けて、コンセプトや社会的意義を実際に形にするための方法を参加者と一緒にワークショップ形式で考えます。展覧会運営の具体的な技術は、まだまだ発展途上です。また、練り上げた瞬間に崩されることもしばしば。そのような事柄を探求できればと思っています。</p>

14日(金) ひびく形

16:30～18:00 平倉圭「身心変容の形(仮)」	<p>身心変容の形について考えたい。身心の変容をみちびく身振りや環境の形について。いまのところ、荒川修作+マドリン・ギンズの映画／ダンス／模型／詩の分析を出発点にしたいと考えていますが、もう少し対象が広がるかもしれません。現在探求中のことから話します。</p>
19:30～21:00 田中純「歌声のかたち——デヴィッド・ボウイの作品を手がかりとして」	<p>歌声という眼に見えぬもの、記号化困難なもの「かたち」について考えたい。具体的に取り上げるのはデヴィッド・ボウイの作品である。ただしそれは、純粋に音楽学的な分析や歌詞のたんに意味論的な考察ではない。対象としたのは、ボウイの歌声それ自体であり、作品の主題と物質的音声との関係性である。手がかりとなるのは歯擦音や喃語、下降旋律などに</p>

15日(土) 形の形

13:30～15:00 久保田晃弘「形と演算:位相空間から共通言語へ」	<p>ある形を形が同じである、とはどういうことか。座標を用いない幾何学＝トポロジーは、位相的に同じかたちを、位相不変量という数によって表現することで、幾何学と代数学の2つの世界をつないだ。こうしてつながれた2つの世界はさらに、双対という操作で相互に行き来することができる。この位相空間、さらに関係（射）のダイナミズムでものごとを描写する圏論、特にアーベル圏のこばで概念や思想、人や社会を語ることは可能なの。自然言語の多義性や曖昧さ、詩的表現をうまく利用してきた哲学や芸術を、演算可能な現代数学の言語で語ろうとすることで、それが異なる分野をつなぐ新たな共通言語になる可能性を考えたい。</p>
16:30～18:00 星野太「フォーマリズムの形式性」	<p>私は「形態」や「輪郭」という意味での物体の「形」を単独で論じることに(今のところ)あまゝ意義を見いだすことができない。むしろ「形」と呼ばれるものは、対象のもつ「形態」や「輪郭」と、それを認識する主体の「形式」が会うところから出来るというのが、今のところ私が手にしている直観である。この問題を、本講義ではカントの図式論から考えはじめたいと思う。そして最終的に言いたいのは、いわゆるフォーマリズムと呼ばれるものが、その方法的な非歴史性に反して、すぐれて歴史的な認識論的条件のうえに成立するものだというところである。これらをスタートとゴールに設定し、時間内で行けるところまで行きたいと思う。</p>

16:30～18:00 星野太「フォーマリズムの形式性」	<p>私は「形態」や「輪郭」という意味での物体の「形」を単独で論じることに(今のところ)あまゝ意義を見いだすことができない。むしろ「形」と呼ばれるものは、対象のもつ「形態」や「輪郭」と、それを認識する主体の「形式」が会うところから出来るというのが、今のところ私が手にしている直観である。この問題を、本講義ではカントの図式論から考えはじめたいと思う。そして最終的に言いたいのは、いわゆるフォーマリズムと呼ばれるものが、その方法的な非歴史性に反して、すぐれて歴史的な認識論的条件のうえに成立するものだというところである。これらをスタートとゴールに設定し、時間内で行けるところまで行きたいと思う。</p>
19:30～21:00 遠藤薫「銀座・バナナ・火花」	<p>形のあるものと無いものなら無いもの選ぶ、と誰かが言っていたことが気になります。形ということ、四つ巴と四畳半と輪業のカオスとフラクタル、各国の貝殻のパターンと各国の染織パターンとセラオートマトンの時間的發展によるパターンが似ているということ、身体としては有機的でありながら生命維持に必要不可欠な塩化ナトリウムの結晶が立方体であること、蚕の糸の吐き方と∞とウロボロスとケルト文様と陶図、グラハム・ベルの正四面体を連続させる空を飛んでしまうことなど、とりとめもなく思い出されるのですが、このことはどこかの本に書いてあることですので、過去のことを話すというよりは、どちらかというとも未来のことを話すうと思っています。具体的に言えば、私がいざこれから制作するつもりのも、つまりまだ形になっていないものについて話そうと思います。結果的に嘘になってしまう事もあるかもしれませんが、それも悪くないかもしれません。</p>

16日(日) 芸術家と形

10:30～12:00 額田大志　ワークショップ「上演と演奏の境界を探る (2020 ver.)」	<p>エンディングは若手アーティストでまとめました。一週間の集中を経て、アートをどのように考えるのか、実践をもとに考えます。</p>
13:30～15:00 遠藤薫「銀座・バナナ・火花」	<p>形のあるものと無いものなら無いもの選ぶ、と誰かが言っていたことが気になります。形ということ、四つ巴と四畳半と輪業のカオスとフラクタル、各国の貝殻のパターンと各国の染織パターンとセラオートマトンの時間的發展によるパターンが似ているということ、身体としては有機的でありながら生命維持に必要不可欠な塩化ナトリウムの結晶が立方体であること、蚕の糸の吐き方と∞とウロボロスとケルト文様と陶図、グラハム・ベルの正四面体を連続させる空を飛んでしまうことなど、とりとめもなく思い出されるのですが、このことはどこかの本に書いてあることですので、過去のことを話すというよりは、どちらかというとも未来のことを話すうと思っています。具体的に言えば、私がいざこれから制作するつもりのも、つまりまだ形になっていないものについて話そうと思います。結果的に嘘になってしまう事もあるかもしれませんが、それも悪くないかもしれません。</p>

<p>BUoY 北千住 BUoY（東京都足立区千住仲町49-11）東京メトロ・JR・東武鉄道「北千住」駅から徒歩8分</p>
<p>主催：PLAYS and WORKS</p> <p>PLAYS and WORKS は、2019年1月に旗揚げされた劇作家岸井大輔のカンパニー、プレイの対象と新たに定義された戯曲および作品と、そのプレイを提示する団体です。本とイベントと手紙演劇をやっています。playsand.work/s/</p>
<p>書籍「形 戯曲」2000円：</p> <p>大岩雄典の作品内戯曲、カゲヤマ氣象台の上演戯曲、岸井大輔の講義戯曲を収録した『形 戯曲』（デザイン：山本悠）を発行します。</p>

19:30～21:00 飯盛元章「オブジェクト指向存在論とアート」
<p>「美学は第一哲学である」。思弁的実在論とオブジェクト指向存在論を牽引してきた哲学者グレアム・ハーマンは、このように述べる。ハーマンにしたがえば、この宇宙のあらゆるタイプの存在者は自らのうちへと引きこもっていて、直接的に関係しあうことはない。ハンマーも、人間も、海賊船も、イルカもそれ自体で自立的に存在しているのだ。こうしたバラバラな存在者は、「魅惑」という美的な働きによって間接的に関係する。魅惑とは、関係から逃れ去りかけて触れられない他の存在者に、触れることなく触れようと試みる美的な働きである。本レクチャーでは、このように美学を重視するオブジェクト指向存在論とアートとの関連について考察する。</p>

19:30～21:00 江澤健一郎「不定形、供儀、共同体」
<p>「美学は第一哲学である」。思弁的実在論とオブジェクト指向存在論を牽引してきた哲学者グレアム・ハーマンは、このように述べる。ハーマンにしたがえば、この宇宙のあらゆるタイプの存在者は自らのうちへと引きこもっていて、直接的に関係しあうことはない。ハンマーも、人間も、海賊船も、イルカもそれ自体で自立的に存在しているのだ。こうしたバラバラな存在者は、「魅惑」という美的な働きによって間接的に関係する。魅惑とは、関係から逃れ去りかけて触れられない他の存在者に、触れることなく触れようと試みる美的な働きである。本レクチャーでは、このように美学を重視するオブジェクト指向存在論とアートとの関連について考察する。</p>

なものであり、かつ、役の把握やテキスト全体の解釈、当時の芸界の動向、人形浄瑠璃ら他の芸能からの影響、そして同時代とも密接に関わり合っている。また、作品の伝承（演目のレパートリー化）という側面から見れば、「型」は受け渡し可能なアーカイブとしての機能も果たしてきた。

本講座では、歌舞伎における「型」を多角的に紐解きつつ、伝統芸能のアーティストたちが「型に託したもの」に迫りたい。

19:30～21:00 江澤健一郎「不定形、供儀、共同体」
<p>企画者からご提案いただいた「不定形」「供儀」「共同体」というテーマをめぐって考察する。バタイユが1929年に用いた「不定形」という用語は、近年美術研究の領域において注目を集めていた。形について考えるために、この用語について考察することから始める。さらにバタイユは、供儀という宗教儀式に生涯注目していた。この儀式は、対象の形を侵襲する儀式であるが、同時に「見る」「見られる」関係によって成立する演劇的なものである。供儀は、それを体験する人々の共同性という問題をほらんでいる。以上の点を考察してみたい。</p>

19:30～21:00 高柳恵里公開インタビュー「世界の手ほどきー高柳恵里と形」（聞き手：飯岡陸）
<p>企画者からご提案いただいた「不定形」「供儀」「共同体」というテーマをめぐって考察する。バタイユが1929年に用いた「不定形」という用語は、近年美術研究の領域において注目を集めていた。形について考えるために、この用語について考察することから始める。さらにバタイユは、供儀という宗教儀式に生涯注目していた。この儀式は、対象の形を侵襲する儀式であるが、同時に「見る」「見られる」関係によって成立する演劇的なものである。供儀は、それを体験する人々の共同性という問題をほらんでいる。以上の点を考察してみたい。</p>

なろう。ロラン・バルトがとりあえず「声の肌理」と呼んだものを、ボウイの声に即し、いきさかなりとも深めて考えることが目標である。ボウイ作品を越え、それがどれほど普遍的な視座を開くことができるかは、2月までの課題とさせていただきます。

19:30～21:00 高柳恵里公開インタビュー「世界の手ほどきー高柳恵里と形」（聞き手：飯岡陸）
<p>使い古された雑巾を乾かすことによる一連の立体作品（1997年）や、あたかも部屋の片隅にあるように文庫本や折り紙、薄片を組み合わせた《置物セット》（2002年）などが代表作として知られる高柳恵里（1962年横浜生まれ）は、80年代に多摩美術大学で学び、80年代後半より発表を始める。当時のインタビューにおいて、イタリア留学時の経験について「コンセプトなんていわれても…。すべてがコンセプトで片付けられるものか、と抵抗を感じました」と語り、先行世代である「もの派」については「どこか形式的な構造を感じる」と抵抗を示すように、そうではないやり方で世界と関わり、その有りようそのものを提示する一貫した姿勢のもとデビューから今日まで制作を続けてきた。高柳にとって「形」とは何か？このインタビューを通して、そのラディカルズムを解いてみたい。（文 飯岡陸 聞き手）</p>

16:30～18:00 「Qua（くあ）」円盤に乗る派
<p>19:30～21:00 大岩雄典「フィクションを技術として」</p> <p>ビエール・ユイグがディレクターを務めた「岡山芸術交流 2019:もし蛇が」のカタログに、「多孔的なフィクション（porous fiction）」という言葉がある。メディアムとしての「フィクション」を、マルセル・プロータースに見出したのはロザリンド・クラウスだ。思弁（speculation）という言葉の流行以後、フィクションは、人間のスケールで推し量り難いもの——環境、「もの」、超越的な時間——を芸術的な装置で取り扱っているかのように見えるメディアムとして用いられている。ユイグは、当の展示であつたフィクションの「記述」を「可能性の不安定な形式化（unstable formalizations）」の一個の連続体と呼んだ。フィクションは非現実的なものではなく、現実のなかに、可能性をなんども書き込む効果であり、技術だ。その意味で、フィクションは現実ではないが、現実的なものだ。美術を制作している経験から、その技術について話せばと思います。</p>

playsand.work/s/katachi/



登壇者プロフィール一覧／関連書籍

★マークのある書籍・雑誌は、池袋の書店「**コ本や**」に取り扱いがあります(売切容赦)。
コ本や honkbooks：東京都豊島区池袋 2-24-2, 2F / tel. 03-6907-2239 / web: https://honkbooks.com

飯岡陸

キュレーター。1992年生まれ。主な企画展に、16年「新しいループ・ゴールドバーク・マシーン」(KAYOKOYUKI・駒込倉庫、東京)、17年「太陽光と…」(テラス計画、札幌)、「渡邊庸平：猫の肌理、雲が裏返る光」(駒込倉庫、東京)、19年「凍りつく窓：生活と芸術」(CAGE GALLERY、東京)。
 turtle-c.com

飯盛元章

専門は形而上学、存在論。中央大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程修了。博士(哲学)。現在、中央大学兼任講師。著書に『連続と断絶—ホワイトヘッドの哲学』(人文書院、2020年刊行予定)、共訳・共著書に『メルロ＝ポンティ 哲学者事典 第二巻・第三巻・別巻』(白水社、2017年)、主な翻訳にグレアム・ハーマン「オブジェクトへの道」(『現代思想』2018年1月号、青土社)など

内野儀

1957年生れ。演劇批評・パフォーマンス研究。学習院女子大学教授。近ごろしばしば、「演劇という形式／演劇における形式」の問題について対話的に考え直したいと思っている。著書に『メロドラマの逆襲』(1996)、『メロドラマからパフォーマンスへ』(2001)、『Crucible Bodies』(2009)、『「J演劇」の場所』(2016)等。

江澤健一郎

1967年生まれ。博士(文学)。フランス文学専攻。立教大学ほか兼任講師。著書に『バタイユ——呪われた思想家』(河出書房新社)、『ジョルジュ・バタイユの《不定形》の美学』(水声社)。共著書に『中平卓馬——来たるべき写真家』(河出書房新社)ほか。訳書にジョルジュ・バタイユ『有罪者——無神学大全』『ドキュマン』(以上、河出文庫)、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージの前で——美術史の目的への問い(増補改訂版)』(法政大学出版局)、ジル・ドゥルーズ『シネマ2*時間イメージ』(共訳、法政大学出版局)、バタイユ『聖なる陰謀——アセفال資料集』(共訳、ちくま学芸文庫)。

遠藤薫

現代美術／工芸作家。1989年生まれ。ベトナム在住。沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。志村ふくみ(絨織、重要無形文化財保持者)主催、アルスシムラ卒業。主な展覧会に「DJもしもしの幽霊について」AIKOKOgallery (2015、東京)、「クロニクル、クロニクル！」クリエイティブセンター大阪(CCO) (2016・17、大阪)、『VOCA展 2019』佳作受賞 上野の森美術館 (2019、東京)、「第13回 shiseido art egg」グランプリ受賞 資生堂ギャラリー (2019、東京)、展覧会予定に『OPEN SITE 2019-2020/「藪を暴く」展』TOKAS (東京)、Art Center Ongoing 主催 テラテラ祭り (東京)、春に青森国際芸術センターにてレジデンス・展覧会を予定。https://www.kaori-endo.com

大岩雄典

美術家。1993年生まれ。東京藝術大学映像研究科博士後期課程在籍。インスタレーション、映像、フィクション、批評をメディアムに、現代美術や展示をめぐる状況における言葉・行為、とくにその「修辞」の側面を哲学的にとりあげて制作。最近では、個展「スローアクター」駒込倉庫 (2018、東京)、ウェブ版美術手帖で毎月展評を連載中、11月発行の『パンのパン04』(きりとりめでの編)などに寄稿、京都市立芸術大学にて非常勤講師、都内でいくつかのレクチャーイベント。
 euskeoiwa.com

カゲヤマ氣象台

1988年静岡県浜松市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。東京と浜松の二都市を拠点として活動する。2008年に演劇プロジェクト「sons wo:」を設立。劇作・演出・音響デザインを手がける。2018年より「円盤に乗る派」に改名。2013年、『野良猫の首輪』でフェスティバル／トーキョー 13公募プログラムに参加。2015年度より2018年度までセゾン文化財団ジュニア・フェロー。近作に『清潔でとても明るい場所を』(2019)『幸福な島の誕生』(2019)『シティIII』(2017、第17回AAF戯曲賞大賞受賞)など。

加治屋健司

美術史家。1971年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科准教授。東京大学芸術創造連携研究機構副機構長、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ代表も務める。著書に『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』(東京大学出版会、近刊)、共編著に『中原佑介美術批評選集』全12巻(現代企画室＋BankART出版、2011-)、共訳書にイヴ＝アラン・ポワ、ロザリンド・E・クラウス『アンフォルム 無形なもの事典』(月曜社、2011)など。

岸井大輔

劇作家、1970年生。1995年より他ジャンルで遂行された形式化が演劇でも可能かを問う作品群を発表している。代表作『potalive』『東京の条件』『好きにやることの喜劇』『始末をかく』。近年は芸術が全て上演になっていくことを劇作家の視点から批判し、PLAY対象である形をつくることを戯曲＝作品と呼ぶことができないか、思考・対話・実践を繰り返している。多摩美術大学演劇無舞踊デザイン学科非常勤講師 美学校講師。

木ノ下裕一

木ノ下歌舞伎主宰。1985年7月4日、和歌山市生まれ。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受けると同時に独学で落語を始め、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学ぶ。2006年に古典演目上演の補綴・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。代表作に「娘道成寺』『黒塚』『東海道四谷怪談—通し上演—』『心中天の網島』『義経千本桜—渡海屋—大物浦—』『糸井版撰州合邦辻』など。2015年に再演した『三人吉三』にて読売演劇大賞 2015年上半期作品賞にノミネート、2016年に上演した『勳進帳』の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。平成29年度芸術文化特別奨励制度奨励者。渋谷・コクーン歌舞伎『切られる与三』(2018)や神田松之丞の講談会(2019)の補綴を務めるなど、外部での古典芸能に関する執筆、講座など多岐にわたって活動中。公益財団法人セゾン文化財団ジュニア・フェロー。

久保田晃弘

1960年生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース教授／アートアーカイヴセンター所長。芸術衛星1号機の「ARTSAT1:INVADER」でARS ELECTRONICA 2015 HYBRID ART部門優秀賞をチーム受賞。「ARTSATプロジェクト」の成果で、第66回芸術選奨文部科学大臣賞(メディア芸術部門)を受賞。近著に『遙かなる他者のためのデ



飯岡陸『連続と断絶—ホワイトヘッドの哲学』(人文書院) 1101頁



内野儀『J演劇の場所』(河出書房新社) 1101頁



江澤健一郎『バタイユ——呪われた思想家』(河出書房新社) 1101頁



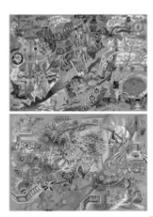
遠藤薫『美術手帖 アニメーションの創造力』(美術手帖) 1101頁



大岩雄典『This is not the Theater.』(河出書房新社) 1101頁



加治屋健司『FROM POSTWAR TO POSTMODERN ART IN JAPAN 1945-1989』(MOMA) 1101頁



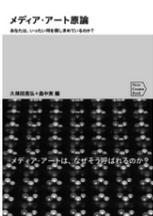
カゲヤマ『野良猫の首輪』(フェスティバル／トーキョー) 1101頁



加治屋健司『アンフォルム化するモダニズム カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』(東京大学出版会) 1101頁



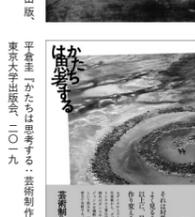
岸井大輔『FESTIVAL/TOKYO DOCUMENT』(河出書房新社) 1101頁



木ノ下裕一『Travels in narratives 物語を旅する』(河出書房新社) 1101頁



久保田晃弘『遙かなる他者のためのデザイン』(河出書房新社) 1101頁



デザイン久保田晃弘の思索と実装』(BNN 新社、2017)『メディアアート原論』(フィルムアート社、共編著、2018)『インスタグラムと現代視覚文化論』(BNN 新社、共編著、2018)『ニュー・ダーク・エイジ』(NTT 出版、監訳、2018)『世界チャンピオンの紙飛行機ブック』(オライリー・ジャパン、監訳、2019)などがある。

河野聡子

1972年福岡県北九州市生まれ。詩人、書評家。ヴァーバル・アート・ユニットTOLTA 代表。刊行詩集に『時計一族』(思潮社)『Japan Quake Map—Sapporo によるヴァリエーション』『WWW/バンダ・チャント』(私家版)『やねとふね』(マイナビ出版)『地上で起きた出来事はぜんぶここからみている』(いぬのせなか座叢書)。書評や論考、エッセイを文芸誌、新聞等に寄稿。実験音楽のユニット「実験音楽とシアターのためのアンサンブル」でも活動している。

郷原佳以

1975年生まれ。フランス文学。パリ第7大学大学院博士課程修了。現在、東京大学大学院総合文化研究科准教授。著書に『モーリス・ブランショ 文学のミニマル・イメージ』(左右社、2011)、訳書にエレヌ・シクスー／ジャック・デリダ『ヴェール』(みすず書房、2014)など。『みすず』誌(みすず書房)で「デリダの文学的想像力」を連載中。

篠田千明

演劇作家、演出家、イベンター。2004年に多摩美術大学の同級生と快楽を立ち上げ、2012年に脱退するまで、中心メンバーとして主に演出、脚本、企画を手がける。以後、バンコクを拠点としソロ活動を続ける。近年は「四つの機劇」「非劇」と、劇の成り立ちそのものを問う作品や、チリの作家の戯曲を元にした人間を見る動物園「ZOO」、その場に来た人が歩くことで革命をシュミレーションする「道をわたる」などを製作している。2018年 Bangkok Biennial で「超常現象館」を主催。

高柳恵里

美術家。1962年生まれ。主な個展に、2019年「それは、正確であるか」see saw gallery+hibit (名古屋)、「性能、他」SAI GALLERY (大阪)、2017年「事実」ITALION GALLERY (東京)、2014年「油断」上野の森美術館ギャラリー (東京)、2013年「不意打ち」TIME & STYLE MIDTOWN (東京)、2003年「近作展 28 高柳恵里」国立国際美術館 (大阪)。主なグループ展に、2007年「20世紀美術探検—アーティストたちの三つの冒険物語—」国立新美術館 (東京)、2001年「美術館を読み解く—表慶館と現代の美術」東京国立博物館、1999年「MOTアニュアル1999 ひそやかなラディカリズム」東京都現代美術館、1992年「彫刻の遠心力—この十年の展開」国立国際美術館(大阪)、多摩美術大学絵画学科油画専攻教授、武蔵野美術大学彫刻学科非常勤講師。

田中純

1960年生まれ。思想史・表象文化論。東京大学大学院総合文化研究科教授。著書に『歴史の地震計』(東京大学出版会、2017)、『過去に触れる』(羽鳥書店、2016)、『冥府の建築家』(みすず書房、2012)、『政治の美学』(東京大学出版会、2008)、『都市の詩学』(東京大学出版会、2007)など。訳書にサイモン・クリッチリー『ボウイ』(新曜社、2017)がある。

中村史子

愛知県美術館学芸員。専門は視覚文化、写真、コンテンツポラリーアート。担当した主な展覧会に「これからの写真」(2014)、「魔術/美術」(2012)、「放課後のほらっぱ」(2009)など。また、若手作家を個展形式で紹介する「APMoA Project, ARCH」を企画し、伊東宣明(2015)、飯山由貴(2015)、梅津庸一(2017)、万代洋輔(2017)を紹介。2017年にはタイでグループ展「Play in the Flow」を企画、実施。

額田大志

作曲家、演出家。1992年東京都出身。東京藝術大学在学中に8人組バンド『東京塩麹』結成。プレイクビーツとミニマルミュージックを掛け合わせたサウンドで、ディスクユニオン主催のDIM. オーディション 2016 に選出。2017年にリリースした1st Album『FACTORY』は、NYの作曲家スティヴ・ライヒから「素晴らしい生バンド」と評された。翌年、FUJI ROCK FESTIVAL'18に出演。また2016年に演劇カンパニー『ストミック』を結成。楽譜のような上演台本とリズムカルな発話、そして俳優の個性を最大限に引き出した演出が特徴。『それからの街』で第16回AAF戯曲賞大賞、古典戯曲の演出でこまばアゴラ演出家コンクール 2018 最優秀演出家賞を受賞。その他の活動として2019年6月に初的小説作品『トゥー・ビー・アニマルズ』を悲劇喜劇(早川書房)に掲載。またJR東海『そうだ 京都、行こう。』を始めとする広告音楽や、市原佐都子『パッコスの信女-ホルスタインの雌』(あいちトリエンナーレ 2019)などの舞台音楽も数多く手掛ける。2019年アーツコミッション・ヨコハマクリエイティブ・チルドレン・フェローシップ。

日和下駄

1995年鳥取県生まれ。横浜国立大学卒。俳優、ライター。コンテンツを使ってあれこれする仕事している。人が集まることと伝え方を考えることが好きなので、コミュニケーションが軸となる集まりをやっています。

平倉圭

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院Y-GSC 准教授。芸術制作における物体化された思考の働きを研究している。最近ではダンス研究を少しずつ。著書に『かたちは思考する—芸術制作の分析』(東京大学出版会、2019年)、『ゴダールの方法』(インスクリプト、第二回表象文化論学会賞受賞)ほか。

星野太

1983年生まれ。美学、表象文化論。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。現在、金沢美術工芸大学講師。著書に『崇高の修辞学』(月曜社、2017年)、共著に『コンテンツポラリー・アート・セオリー』(イオスアートブックス、2013年)など。

松永伸司

専門はゲーム研究と美学。著書に『ビデオゲームの美学』(慶應義塾大学出版会、2018年)、訳書にイエスパー・ユール『ハーブリアル』(ニューゲームズオーダー、2016年)、ネルソン・グッドマン『芸術の言語』(慶應義塾大学出版会、2017年)、ミゲル・シカール『プレイ・マターズ』(フィルムアート社、2019年)など。

(50音順)